



Title	吐魯番出土文物研究会会報 第25号 : 特集・文書閲覧Ⅱ
Author(s)	
Citation	吐魯番出土文物研究会会報. 1989, 25, p. 1-4
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/78835
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

吐魯番出土文物研究会会報

1989年11月15日
吐魯番出土文物研究会

第25号

特集・文書閲覧Ⅱ

【は じ め に】

本号では、前号に引き続いて本年五月二九（月）、三〇（火）の両日、会員の關尾史郎が龍谷大学大宮図書館において大谷文書を閲覧して得た知見を紹介する。当日は前号に紹介した唐代の納税抄類のほか、高昌国時代の文書若干についても閲覧する機会に恵まれた。本号で紹介するのはこの高昌国時代の文書である。

なお訳読の責任が閲覧者である關尾個人に存することは、前号と全く同様である。

☆ ☆ ☆ ☆

A. 池田温『中国古代籍帳研究－概観・録文－』（東京大学出版会、一九七九年。以下、『籍帳研究』）・小田義久主編『大谷文書集成』第壹（法蔵館、一九八四年。以下、『文書集成』）に収録されている文書

★大谷1040号文書（『籍帳研究』105、311頁／『文書集成』、8頁）

全四行。紙の前後に二次利用された際のものと思われる縫目の痕がある。

第四行目末尾の「𠂔𠂔𠂔」（『籍帳研究』）は、「了」字（『文書集成』）が大書されたものと判断できる。

☆大谷1040号文書紙背（『籍帳研究』106、311頁／『文書集成』、9頁）

全四行。紙表とは天地が逆になっており、第一行目の前方と、第三、第四行目の中間に縫目の痕がある。

第一行目と第二行目の「錢」字（『籍帳研究』）は、ともに「錢」字（『文書集成』）とすべきであろう。

第二行目の「貧早」（『文書集成』）は、明らかに「食早」（『籍帳研究』）の誤りである。

第二行目の「二置三」の三字の右横に三字が、またこの「三」字の下方にも文字が認められるが、いずれも判読はできなかった。

第三行目の「𠂔」字（『文書集成』）と二番目の「𠂔」字（『籍帳研究』）は、それぞれ正しくは「𠂔」字（『籍帳研究』）、「𠂔」字（『文書集成』）とすべきであろう。

また同じく「九」字（『籍帳研究』）は「𠂔」の異体字であり（『文書集成』）、その下方には「了」字が大書されている。

第四行目の末尾は「置了」（了は大書）と判読できる。なお「置」字の上にも朱線が入っている。

★大谷4059号文書（『籍帳研究』107、311頁）

「第六包の29 壁土附着」と記された袋に入れられている。

全五行。会員の白須淨眞が指摘しているように（同「麹氏高昌国における上奏文書試釈－民部・兵部・都官・屯田等諸官司上奏文書の検討－」（『東洋史苑』第二三号、一九八四年）、五五頁註⑩、参照）、第五行目の文言は、この文書が上奏文書であることを示している。したがって、文書の標題についても、『吐魯番出土文書』に倣えば、「高昌年次未詳（六世紀後期或七世紀前期）某

部條列用城作人數奏行文書」とでもすべきであろう。

後方に裏打のような形で小さな別紙(7.3×6.5)が貼付されており、天地を逆にして全三行が認められるが、内容については明らかにしない。

1. 二二二二楊阿券
2. 二二二二
3. 得二二二二

B. 『籍帳研究』・『文書集成』に収録されていない文書

★大谷3467号文書

袋に「ミイラ履物用」と注記されている。この文書が高昌国時代のものと考えられる根拠は、この前後の文書がいずれも高昌国時代の契約文書であり、しかもミイラの履物から析出されているということであるが、断定はなお困難であろう。なおこの文書は、5.5×28.0という横長の紙片を二枚貼りつなぎ（以下、a、bとする）、その中心部分で折りたたみ、紙背に墨を塗った形で出土したと思われるが、さらに内側になっていた紙表には、零細な断片が付着していて、釈読が可能な部分はほんの一部にすぎない。

[a] 全八～九行。冒頭の三行は以下の通り。

1. □□□□
2. 張安富□
3. □□日□

[b] 全八～九行で、冒頭部分には朱筆も認められる。末尾の三行は以下の通り。

十六 寧昌□
年君□
廿二 寧戎□

★大谷4060号文書

袋に「第六包の30」と記されている。

全六行。この文書について、龍谷大学西域文化研究会編『大谷探検隊将来西域出土古文書目録 社会経済関係』（編者油印、一九五六年。以下、『古文書目録』）は、「高昌城作人の食料品価格を記入せるもの」としているが、前頁の4059号文書と全く同じ文言が第三行目に見えるので、高昌国時代の上奏文書と断定してかまわない。残念ながら『古文書目録』の指摘するような内容か否か判定できる材料を欠くので、標題についてはとりあえず、「高昌年次未詳（六世紀後期或七世紀前期）某部殘奏」としておきたい。なお紙背にも文字の存在が認められるが、判読はできなかった。

第六行目は中程まで墨を塗って抹消された形跡が認められる。

（前 缺）

1. 二□□□□蘭蒲桃價甜醬醋万□□□□
2. 價甜醬壹伯貳拾研。 都合得甜醬壹□□
3. 謹案條列得□二二二二□□數列別如□
4. □閣主簿□□

6. _____

「C. Turfan (G) 3」と記された台紙に貼付されている。17.0×43.0

第一三行目の「辟」字は、正しくは「壁」字。

「Turfan(G) 3-1」と記された台紙に貼付されている。この文書の第五行目がつぎの大谷四九
一—号文書の第一行目に相当し、元来は全六行からなる一点の文書であった。なお高昌国時代の
ものと断言できる根拠はなく、むしろ唐代文書である可能性が高い。30.0×13.5

(後 缺)

「Turfan (G) 6-15」と記された台紙に貼付されている。30.0×17.5

(余 白)

-3-

■ 紹介：武漢大学歴史系魏晉南北朝隋唐史研究室編『魏晉南北朝隋唐史資料』

中国における魏晉南北朝・隋唐史と敦煌・吐魯番文書の研究を常にリードしてきた武漢大学歴史系の魏晉南北朝隋唐史研究室の編集になる『魏晉南北朝隋唐史資料』は、一九七九年の創刊以来、短編ながら注目すべき論文を数多く掲載してきたが、残念ながら内部発行のため、『文物』や『中国史研究』などのいわゆる全国誌に再録されたごく一部の論文を別にすれば、その全容に接することはほとんど不可能に近かった。しかし幸いにして一九八六年一二月発行の第八期以後、新たに武漢大学学報社会科学論叢の一冊として公開発行されることになり、今この第八期と一九八八年一二月に発行された第九・一〇期の二号を手にすることができる（後者から、活字がドット文字に改められた）。

第九・一〇期に唐長孺氏のお名前が見られないのが気に懸かるが、そのことを除けば、同研究室内のスタッフが全員で、雑誌のタイトルにふさわしい史料に即した実証的な短編を寄せていることは、第七期までと同様である。また第九期と第一〇期はいわゆる合併号の体裁をとっているが、スタッフの多くは二篇づつ論文を発表しているので、このことが直ちに同研究室の活動の停滞を意味するわけではない。

刊行中の『吐魯番出土文書』の整理小組に、同研究室のスタッフが多く参加していたことを考えれば、吐魯番文書を取り上げた論文がこの誌上にも少なくないであろうことは容易に推測できようが、程喜霖氏の「《唐開元二十一年（733）西州都督府勘給過所案卷》考釈－兼論請過所程序与勘驗過所－」（8,9・10）や、陳國燦氏の「対高昌国某寺全年用月帳の計量分析－兼析高昌国の租税制度－」、「從葬儀看道教“天神”觀在高昌国的流行」（ともに9・10）などは整理小組に参加したスタッフによる成果であり、とくに陳氏の前稿では、会員の關尾が本誌第一六号と第一七号で検討した高昌国時代の文書に散見される「劑」字についての新しい解釈が示されている。吐魯番文書に関するものではこれ以外にも、陳國棟氏の「吐魯番所出《唐勒依限徵納稅錢文書》跋」（8）、「唐代民族貿易与管理雜考」（9・10）や、孫繼民氏の「唐西州張無價及其相關文書」（9・10）など整理小組以後の若手研究者による成果に接することができる。

また整理小組のメンバーで、現在武漢大学歴史系の主任でもある朱雷氏は、「敦煌藏經洞所出兩種麴氏高昌人写經題記跋」（9・10）のほか、ここでは「《捉季布伝文》、《嶺山遠公話》、《董永変文》諸篇辨疑－讀敦煌変文札記（二）－」（8）、「《舜子変》、《前漢劉家太子伝》、《唐太宗入冥記》諸篇辨疑－讀《敦煌変文集》札記（三）－」（9・10）など敦煌変文に取り組んだ成果を発表している。なお中央アジア史に関連する論文としては以上のほかにも、陳國燦氏の「八、九世紀間唐朝西州統治権の轉移」（8）や、若手研究者である牟發松氏の「唐代都督府の置廢」（8）がある（同氏は最近『唐代長江中游的經濟与社会』（武漢 武漢大学出版社、一九八九年）も発表している）。

出土文物たると編纂史料たるとを問わず、史料に対しては徹底した分析を等しく特徴とすることこれらの論文から学ぶことは少なくなく、また『吐魯番出土文書』が出揃いつつあるなかで、新たな局面をむかえている吐魯番文書研究に資する所も大であると言えよう。（N）

事務局（連絡先） 〒182 東京都調布市国領町5-19-14

荒川正晴 方

TEL 0424(81)4633

吐魯番出土文物研究会 (The Research Society for Turfan Relics)